本阿弥光悦書状（新兵衛宛）と光悦蒔絵

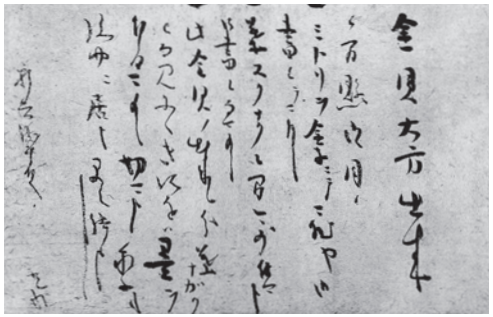
書状は誰かに何かを伝えるために書かれます。また、同じ書き手でも相手や書状の内容、書いている時の状況や気持ち、年齢による心境の変化などによって、書体や筆の運びは微妙に異なります。筆者の息使いまで伝わるような臨場感は書状の大きな魅力です。

本阿弥光悦（1558～1637）は刀剣の鑑定、砥ぎなどを家職とする家に生まれました。光悦の活躍した桃山時代の末から江戸時代の初頭には、公家、武家、町衆の文化が融合し、華やかな文化が築かれました。光悦はその文化を担った重要な町衆の一人です。光悦作と伝えられる美術作品は、書、陶磁、漆工と幅広い分野にわたります。

本阿弥光悦書状（新兵衛宛）には、光悦が蒔絵作品の制作を指導する様子がうかがえます。宛名は「新兵衛尉」、「尉」は年長者に対する尊称ですから「新兵衛」です。書状の冒頭に「金貝大方出来候間懸御目候」と大きく記しています。「金貝」は薄い金属を意匠の形に切ったもので、蒔絵の装飾に用います。「金貝がほとんど出来ましたので、お目にかけます。」という意味です。この書状はその金貝とともに送られたようです。続いて、誤解を避けるために、カタカナ混じりの箇条書きで三つの要件を次のように伝えています。「一、ミトリを金子ニテ可然候や　御書候テ可給候／一、葉スクナク候間今少付可申候　御書候而可給候／一、此金貝ノ出来候分葉ナガク候而見にくき所をハ墨ヲ付而可給候　切可申候　我等も□□に居申候早々待申候」。簡潔な文章にふさわしく、書にも溌剌としたリズムが感じられます。まず、金貝の素材を尋ねています。「ミトリ」とは「見取り」（見取図）あるいは「緑」（草花の葉や枝）と思われます。その部分は「金子」（金金貝）でよいかということです。次は意匠です。光悦は葉が少ないと思い、増やそうとしています。この二件は末制作の金貝に関します。最後は制作された金貝について、葉が長いので短く修正するように述べています。光悦の居場所を示す□□の文字は、判読しずらいのですが、仮に「洛北」と読めば、光悦が元和元年（1615）に徳川家康から拝領した鷹ケ峰の光悦村にあたります。そこに早急に返事を下さいと結んでいます。

この書状では光悦が新兵衛の意向を伺っています。おそらく、新兵衛が光悦に依頼したのでしょう。しかし、実際には積極的に意見を述べているのは光悦自身で、新兵衛には同意を求めています。蒔絵作品は素地、塗り、蒔絵などの行程を分業しますので、特別な作品の制作には、全行程を指導する人物が必要です。その役割を光悦が果たしたならば、実制作に携わらなくとも、光悦蒔絵と言えます。

本阿弥光悦書状　新兵衛（尉）宛



光悦蒔絵と伝えられる作品には、明らかに他の蒔絵作品とは区別できる特色が認められます。斬新な器形、大胆な意匠、青貝（螺鈿）や金貝による多彩な装飾です。例えば、金金貝、金高蒔絵、鉛板によって23頭もの鹿を表す「沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒」（大和文華館蔵）は、光悦蒔絵の典型的な作風を示しています。特に、この作品では、鹿を文様のように全体に散らしながら、生動感を失わない意匠構成に注目されます。

このような鹿の意匠は、1616年頃にクロード・ドゥルエの描いた油彩画、「支倉常長像」（ローマ・ボルゲーゼ宮所在　個人蔵）に見出せます。常長は仙台藩伊達家の家臣です。スペインとの通商を願う伊達正宗の命を受け、慶長18年（1613）9月15日に出帆し、ヨーロッパに渡りました。「支倉常長像」は元和元年（1615）9月5日に行われたローマ入市式の姿です。華麗な服装は後に法王に贈呈されたと考えられています。この常長の胴服に木と鹿の意匠が用いられています。木の意匠は西欧風ですが、鹿の意匠には「沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒」に近い表現が見られます。ここでは、漆黒の漆ではなく、純白の生地に金銀の鹿が遊んでいます。正宗は西洋風の装飾を意識し、法王に贈る最高の服装を依頼したと思われます。「沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒」と「支倉常長像」の胴服が、同時期の京都で制作されたとすれば、同じ絵師が下絵を描いた可能性もあります。

光悦蒔絵は優れた技術者たちの共同制作による作品です。光悦が直接、制作に携わらない以上、光悦蒔絵の示す斬新な造形性は、光悦が登用した才能ある人材によって実現されたと言えます。大胆な意匠や曲面を多用する器形を見れば、染織や家業に近い刀装具や武具、甲冑に関わる技術者を登用したことも考えられます。しかし、その中心はあくまで光悦です。光悦蒔絵は当時の技術者たちの力量、多くの才能を一つの作品に結実させる光悦の美意識と指導力の大きさを如実に物語っています。

（中部義隆）

（「支倉常長像」の挿図写真は平成２年にサントリー美術館で開催された『伊達正宗とローマ使節・支倉常長』展の図版目録より複写させていただきました。）

支倉常長像（部分）クロード・ドゥルエ筆
個人蔵、ローマ・ボルゲーゼ宮所在

重要文化財　沃懸地青貝金貝蒔絵
群鹿文笛筒　伝本阿弥光悦作

季刊 美のたより №135
平成13年７月６日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.